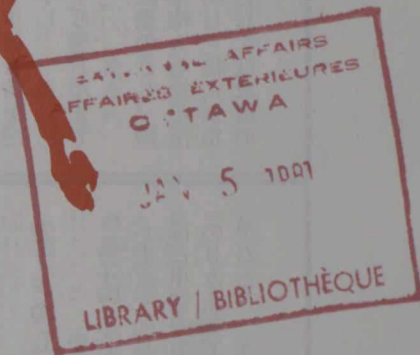


CAL
EA947
B71
#32 Nov. 1980
DOCS



カナダ観光特集

1980年11月
No.32
ISSN 0389-1852



トピックス—— 2

私のカナダ旅行・内野栄子—— 4

カナダ横断の旅／その限りない魅力—— 7

カナダへの入国—— 8

カナダの主な行事—— 10

カナダの2公園が「国際文化遺跡」に—— 10

カナダ特派員日記②・橋田忠明

カナダ人の生活にとけ込むレジヤ—— 12


観光カナダと文学カナダ・平野敬—— 14

カナダ人の発明発見(Ⅶ)—— 16

編集後記—— 16



Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

トルドー首相の憲法決議案 連邦議会にて年内に成立か

トルドー首相は、十月六日、連邦下院に憲法（「英国領北アメリカ条約」）の力ナダ移管に関する決議案を提出した。これは、「権利の憲章」および修正条項を新たに加えた上で同条約を力ナダへ移管するよう英国議会に求めることを提案したもので、九月に開かれた憲法に関する連邦・州首相会議が物別れに終わったため、この措置となった。

決議案は、まず、憲法修正条項を書き加えて同条約を移管するよう英国議会に要請することを提案している。憲法修正は、これまで形式的ながらも英国議会の承認を必要としていた。決議案によると、これが最初の二年間は連邦と十州の全体一致、その後は連邦政府と大多数の州の合意によって修正できることになる。これで、力ナダは名実共に自主憲法をもつことになるわけである。

第二に、所属する州の如何を問わず、国民全体に良心、言論、集会、選挙などの諸権利、人種、性、皮ふの色などによる差別を受けけない平等な法的保護、就職や居住の

ための移動の自由、場所の如何を問わず、数的条件が合えば英語系およびフランス語系の住民が子供にそれぞれの言語で教育を受けさせる権利——などの諸権利を保障する憲章を憲法に制定する。

第三に、各州の経済的格差是正を図るため、現行の平衡交付金制度を憲法で定める——などが内容になっている。

トルドー首相のこの決議案に対し、ブリティッシュ・コロンビア、アルバータ、マニトバ、ケベック、ニューファンドランド、プリンス・エドワード島の六州は、連邦政府は州との協議もしくは州の合意なしに憲法の改正と移管を英国議会に要請できない、天然ガスに対する輸出税や言語権の制定は州権に対する連邦権の侵害、などの理由で法延闘争の構えを見せている。

トルドー首相としては、この決議案に対する連邦議会の承認を十二月末までにとりつけ、ただちに英国議会に移管を要請、来年の建国記念日（七月一日）までには自主憲法を実現したい意向である。進歩保守党が強く反対しているものの、すでに連邦下院の第一読会（議案審議の可否を決める）を通過しており、予定通り今年中には議会で承認されるものと確実視さ

れている。
なお、英国議会は、カナダ政府からの憲法上の要請を自動的に承認するのが慣例になっている。

トルドー内閣の新予算案 エネルギー自立を強調

マケツカン大蔵大臣は、十月十七日、連邦下院に第四次トルドー政権（今年三月発足）初の予算案を提出、承認を得た。

予算案の中心は一九八〇年代におけるエネルギー政策。これは①省エネルギーと代替エネルギーの利用によってエネルギー輸入を漸次減らし、一九九〇年までに世界石油市場からの自立を達成する②国内石油・天然ガス産業における民族資本の支配を強める③価格および収益分担の公正化を図る——

という三つの原則を柱とし、代替エネルギーと省エネ技術の商業生産を支援するため、資本金二千万ドルの公社「エナージェック・カナダ」の創立を提案している。

予算案の要旨は次の通り。
一、所得税（個人および法人）売上げ税はすえおく。

一、歳出については、支出削減によって、赤字を今年の百四十二億ドルから漸次縮小し、一九八三—八四年度には百十八億ドルまでもつていく。

一、エネルギー政策のうち、国内消費者石油価格は輸入石油と国産石油の価格を平均し、輸入価格の八五パーセントもしくは米国の

平均石油価格のうち、低い方の価格を上回らない範囲で引上げる。
一、通常石油の井戸元価格を、一九八一年一月一日からバレル当り一ドル、八四年一月一日からバレル当り二・二五ドル、八六年にはバレル当り三・五ドル引上げる。

一、天然ガスには輸出税を課さず、ガス液を含むすべての天然ガスに対する一率の連邦税を新設する。また国内の石油・天然ガス生産による純収益に対し、八パーセントの新税を課す。二つの新税により今後三年間で見込まれる税収は百十七万ドル。これは西部カナダの発展とエネルギー開発に使われる。

一、発電源の石油から石炭への転換（大西洋諸州）や水力発電開発（ラブラドル）を助成し、研究開発および新公社エナージェックを通じて再生エネルギー技術を推進する。

一、民族資本による国内石油、天然ガス生産の所有率を、一九九〇年までに少なくとも五〇パーセントまで高める。石油の純輸入量（現在およそ日量二十一万五千バレル）をへらし、一九九〇年までにゼロとする。

カナダのLNG、日本へ

カナダの石油・天然ガス会社、ドーム・ベトロリアム社は、このほど中部電力、九州電力など五つの日本企業で構成するコンソーシアムと、一九八五年から二〇年間、

年間二百六十万トンの液化天然ガス（LNG）を輸出するということが基本的合意に達した。実現すれば、カナダの天然ガスが初めて米国以外の国に輸出されることになる。

日加協会が創立五十周年

日加協会（近藤晋一会長）が今年で創立五十周年を迎え、その記念祝賀晩餐会が十月十六日、帝国ホテルで行なわれた。

晩餐会には、ランキン駐日大使夫妻、椎名時四郎・関西日加協会会長、稲山寛三・経団連会長、L・ベトコウ在日カナダ実業人協会会長、横田久生・日加経済人会議日本委員会委員長、来日中のバット・ジョーダンB・C州観光大臣らのほか、二百人近い会員および同伴者が出席、盛況であった。

大来佐武郎・対外経済担当政府代表が日加関係について講演したほか、鈴木総理大臣、トルドー首相、河本・日加議員連盟会長、森鼻・北海道カナダ協会会長らが祝辞を寄せた。

来年のサミットはオタワで インフレ、南北問題等を討議

日、米、英、フランス、西ドイツ、カナダ、イタリアの七か国首脳と欧州共同体（EC）代表が参加する次の先進国首脳会議（サミット）は、来年七月二十、二十一日の両日、カナダの首都オタワで開

かれることになった。
トルドー首相は、特にいわゆる南北問題を重視しており、今度のサミットでは開発途上国が抱える厳しい諸問題のほか、東京サミット、ベニス・サミットに引き続き、インフレ抑制策やエネルギー戦略も重要議題となるはずである。

日本に友好的なカナダ人 日本外務省が世論調査

「カナダにおける対日関心はきわめて高く、カナダ人の対日観も良好」——日本の外務省がカナダで行なった世論調査の結果である。この調査は、外務省が今年の六月五日から七日にかけて、カナダ、ギヤラップ・ポール社に委託、五つの地域から無差別に抽出した十八才以上のカナダ人一、〇四五人を対象に、個別インタビュー形式で実施した。英米など八か国と比較した対日友好度、カナダ人の対日観、日本製品の評価などについて調査した。

主な結果は次の通り。
一、カナダ人の「日本に対する友好度」は昭和四八年度の調査で七二%、五一年度の調査で七一%であったが今回は八三%に増加した。米国（九二%）英国（九〇%）への友好度が日本より高いのは変わらない。今回新たに加えたオーストラリアに対しては、カナダ人の友好度（八七%）は日本よりも高い。
一、「アジア・太平洋地域にお

けるカナダの最重要パートナー」は、前回と同じく日本が第一位。第二位のオーストラリア、第三位中国の比率がほとんど変わっていないのに比べ、日本は前回三五%から今回四六%と大幅に伸びている。また、その理由として「良好な貿易関係」をあげた者は、前回の三三%から五九%に急増した。
一、日本は「アジアの安定勢力となる」と考えているカナダ人は、これまで同様相変わらず過半数を占めた。（四八年度五三%、五一年度五一%、五五年度五四%）他方、これを否定的に見ている者は徐々に減少している。

一、「日本製品の評価」については、「優秀」ないし「良質」と考えるカナダ人は四八年度五六%、五一年度五九%よりさらにふえて六六%となった。

一、「日加貿易の拡大」を望んでいるカナダ人は、従来約六割を占めていた（四八年度六〇%、五一年度五九%）が、新たに回答例「現状維持でよい」を加えたところ、三五%がこれを支持したため、今回は三六%にとどまった。

「日加貿易の拡大」を望む理由として「日本市場が必要である」を挙げている者が圧倒的に多い（五〇%）。「拡大すべきでない」とする者（一四%）のうち、理由として「カナダ人の雇用機会を奪う」を挙げた者が急増している（前回三三%、今回七四%）。他方、「これ以上日本製品のカナダ流入は好ましくない」と答えた者は、前回

四四%あったが、今回は一六%に減少した。

一、「日本人のイメージ」を表わす言葉としては、これまでと同様、「勤勉」、「知的」、「進歩的」が上位を占め、しかもその比率は伸びている。

一方、好ましくないイメージとして、「秘密主義」、「権威に弱い」及び「好戦的」を選んだ者は、それぞれ一三%、一〇%及び九%であった。

片足で五千キロ走破 ガン研究の募金運動で

ガンで片足を失ったカナダの一青年が、ガン研究の資金を募るため、五千三百キロを走破、その壮挙にカナダ全国から一千二百万ドル（約十七億五千万円）をこえる寄付が集まった。



UPI・サン

この青年、テリー・フォックス君（二十二才写真）は、三年前、ガンのため右足をひざ上から切断された。しかしそれにもめげず、ガン撲滅のための研究費を集めようとして、今年の四月十二日、大西洋側のニューファンドランド州の首都セント・ジョンズから全

長八、三二〇キロのカナダ横断マラソンをはじめた。マラソンは九月一日、オンタリオ州サンダー・ベイに達したところで、テリー君の肺にガンの二次感染が発見されたため、中断され、テリー君は急拠バンクーバー近郊の病院に運ばれた。

寄付は九月一日までに二百万ドルに達し、その後、中断の発表やテレビの特別長時間番組によってさらに一千万ドル以上が集まった。特別番組が放送された晩、ウイニペグで行なわれていた全加フットボール競技大会では、観客が七千ドル近くを寄付した。またテリー君がかつて運動学を勉強していたブリティッシュ・コロンビア州のサイモン・フレージャー大学では、彼が示した勇氣と献身をもち合わせた学生に、毎年、金メダルと千ドルの賞金を授与することになった。

連邦政府は、九月五日、テリー・フォックス君にカナダ最高の榮譽である「カナダ勲章」を授けた。史上最年少の受賞者である。

耳の不自由な人々のために
字幕つきテレビ画面を検討

耳の不自由な人々にもテレビを——と、カナダではテリドン文字図形伝送システムを利用して、画面に字幕をつけることを検討している。

これは、字幕用の文字を電波またはケーブルで送り、それをテレ

ビにとりつけた特別のデコーダー（解説）装置で画面に写し出すというもので、クロスド・キャプシヨニングと呼ばれる。
カナダにおけるビデオテックスの利用を検討しているカナダ・ビデオテックス懇談委員会にこのほどこ設けられた政経グループが、デコーダーの国内需要、字幕をつけるための費用、技術などについて調査することになっている。

カナダの人口二、三八七万人

カナダの総人口は、今年の四月一日現在で、推定二三、八六九、七〇〇人に達した。州別の人口は次の通り。カッコ内は一九七一年の国勢調査の結果。

オンタリオ	8,558,200	(7,703,000)
ケベック	6,298,000	(6,028,000)
ブリティッシュ・コロンビア	2,626,400	(2,185,000)
アルバータ	2,068,800	(1,628,000)
マニトバ	1,027,100	(988,000)
サスカチュワン	967,400	(926,000)
ノバ・スコシア	851,600	(789,000)
ニュー・ブランズウィック	705,700	(635,000)
ニューファンドランド	578,200	(522,000)
プリンス・エドワード島	124,000	(112,000)
北西準州	42,800	(34,800)
ユーコン準州	21,400	(18,400)

私のカナダ旅行

内野栄子

四〇日間は、長いのだろうか、短いのだろうか。地理的にも、文化の多様性の上でも、また人の心もケタはずれに大きなカナダという国を理解しようとした私にとっては、それは短かすぎる期間だったし、一人の女の子としての私の心には、じゅうぶんすぎるほどの感動を与えてくれた期間でもあった。

カナダ旅行中、私は驚きづめであったような気がする。いわゆる名所はもちろんのだが、それ以上に私にとっては、自分の生活に今までかかわってなかった、おそらくカナダ人にとっては生活のコマにしかすぎないことがらが、とても新鮮に感じられた。想像した以上の木々の多さ、潤沢に使われている水、決して大きくはないが、どこかのびやかに建つ

家々……。そしてふと時計を見ると、夜の八時になっているというのにあくまで青く、明かるい空。

話で聞き、本で読み、頭で理解していたはずのことが、現実になってみると、こころも異なっていて感じられるものか……。既製の観念を捨て、素直に驚くことこそが、カナダという国を知るのに最良の方法なのだ、と私はそのとき強く感じた。

カナディアン・ロッキー

まずカナディアン・ロッキーの景観がすばらしかった。冷たく澄み切った空気の中、私の眼前に次々と現れる、壮大な錦絵。サファイアの一枚板のような、石を投げれば壊れてしまいそうな湖面に写される山々は雪を頂き、木々は空を突き刺すように真っすぐ伸び、その中に生き生きと活動する、人を怖れないリスや大角鹿、そしてコヨーテの子。すべてが私の中に驚きを呼び起こさずにはおかない。

「カナディアン・ロッキーだけでカナダのイメージを作らないで欲しい。それだけがカナダではないのだから」という、多くのカナダ人の言葉を私は想い起こしていた。しかし、それは無理ではなからうか。自然の景観だけで、私たちの心はじゅうぶんすぎるほどに満足してしまうのだから。

カナダの最南端は、カリフォルニアの北端より南にある。ポイント・ピリーというその国立公園で、初めて五大湖を見

たときの驚きも忘れられない。白い砂浜には波がうちよせ、水平線まで、眼をささぎるものはない。私にはどう見ても海にしか見えないのだが、何度なめてみたところで、水は塩辛くはない。この遶方もない広がり、高速道路を走っている感じられるのと同じように、私の感覚ではとらえきれない大きさというものを強く感じさせてくれた。時速百五〇キロで走っても、どこまでも真っすぐに地平線へ向かって伸びる道路も、見わたす限り的小麦畑も、轟々たる音をたててなだれ落ちるナイアガラの滝も、大西洋岸の、川上へと逆流する潮の流れも、すべてがじつとしているとちっぽけな私など呑み込んでしまいそうな、茫莫とした広がり、で私に迫って来た。

いくつものカナダ

カナダを巡って、まるでいくつもの異なった国々を訪れたように思えるのはなぜだろうか。カナダを訪れる前、私は「カナダの内包する文化は、英国系、フランス系の二つに大別されるだろう」と考えていた。ある意味で、それは誤りだった。確かに、大きな目で国家的規模での文化というものを考えれば、英国系、フランス系の文化が、ダイナミックな米国の文化と対応して、とらえられるかもしれない。歴史的にも、英国、フランスの対抗の中にカナダは生まれ、育ってきた。しかし、個人の生活のレベルでカナダの文化をとらえようとすれば、様々の生活

様式、態度の違いが見えてくる。例えば、兄の友人の若いカナダ人と話していたとき、話がなまたまオリンピックのことになった。「日本は体操とバレーボールが強い」「カナダはウィンタースポーツすべてに強い」——とそこまではよかつたのだが、そのあとは、各人各様の、父祖の国の応援だった。両親がフィンランドから来たという女の子は、フィンランドの距離スキートの強さを言い、英国系の少年は、英国の馬術の強さを、ドイツ系の女の子は……という具合である。



「What's your nationality?」という言葉が「あなたの国籍は？」ではなく、「あなたは何系なの？」の意味で飛びかい、「〇〇系カナダ人であることに、父祖の血に、そしてその文化に、みんなが誇りをいた



いていた。友人同士語るときは英語を用い、家ではイタリア語、といったパターンは珍しくないという。小さな街ですら、各国料理の材料専門店が目につき、ひとたびお祭りとなれば、民族衣裳を可愛く着込んだ子供たちが街にあふれるのも、このことを象徴している。しかし、私にとって面白いのは、そういう多様性が、実は、人々がきわめて似通った生活方法をしているという基盤の上になり立っていることである。同じ用具を用い、同じスニーカーマーケットで買い物をし、同じ型の車で同じ映画へ出かけるのは、ある意味で、きわめてカナダ的な要素と言えると思う。こうしたカナダ的生活基盤の上に、よくいわれるカナダの「モザイク文化」はそれぞれ父祖の文化を受けついで様々な細片が調和して、多民族の文化がひとつに融けあつた輝きを反射しつつ、ひとつの模様を描き出すのだろう。

言葉は文化を支えるひとつの大きな柱である。英国圏で生まれ、育つてゆくカナダ人たちは、この面では大きな文化的基盤を共有することができる。カナダの

人口構成は英国系が約四割、三割強がフランス系、残り三割が他のヨーロッパ諸国とアジア系といわれるが、実際、フランス系住民を除けば、ほぼ全員が「英語国民」と言つて良い。

フランス系住民は、大半がケベックに住んでいるのだが、ケベックの人々は自らを誇りをこめてケベックワ―ケベック人―と呼び、カナダからの独立を標榜する州政権のもとにある。私には、ひとつの国の一部分が独立する、というのは、実感として信じられないのだが、それをケベックワの悲願と評する人もいれば、無謀だという人もいる。私にはどちらかが正しいか判断などできない。しかし、若い国カナダが、その文化のアイデンティティを求めて「モザイク模様」を完成させるためには、ケベック色の細片は絶対に必要なのではないか、という気がする。私は、ここで日系カナダ人の方々に忘れる訳にはゆかない。総人口二千三百万のうち、わずか四万人余。しかし、日系カナダ人はカナダ文化の一部であると同時に、日本人の心を持ちつつカナダ人の眼で日本を見つめる人々である。日本という国を外から見つめる視点を、私は数多くの日系カナダ人の方々に教えていただき、またカナダ人としてのカナダのとらえ方も、色々な形で私のカナダ観に大きな影響を与えてくれた。

カナダの町

「街には顔がある」と言った人がいる。そ

こに集まり、働き、暮らしている人々の生きざまが、心が街に反映されているのだという。

全般に、カナダの街は、こぎれいという印象が強い。カナダ旅行の途中立ち寄ったアメリカは、家の造りが素晴らしく豪華なものと、粗末なものとの差が大きいように感じられたが、カナダの家々は、一様にあるレベルを保っているように見えた。しかし一軒として同じ家はない。全ての家が、持ち主の個性を表わすかのように入入れられている。

大きな街、小さな街。工業の街、商業の街。私は、カナダの東側三分の一、州でいえばオンタリオ、ケベック、更に大西洋岸のニュー・ブランズウィック、ブ

リンズ・エドワード・アイランド、ノバ・スコシアと、五州にまたがって兄の車で移動したのだが、広大な国土に点在する町々が、実に様々の顔を持っていることに気がついた。夏のカナダは休暇の季節である。その中でも、しかし活気に溢れた街と生活そのものがのんびり感じられる街がある。私にとっては、前者の代表はトロントだし、後者の代表はニュー・ブランズウィック州のセント・ジョンという街だった。

あらゆる肌の人間が、ちよつと気取つた表情で、少し忙しげに歩くトロント、街の中心の小さな公園で日なたぼっこをしている老人ばかり眼についたセント・ジョン。こういった大きな街が人種の集



撮影 L. ストースター

昨年の日加協会主催「日加関係五〇周年記念論文コンテスト」で入賞した内野栄子さんは、賞金と副賞（東京・モントリオール間の往復航空券）を利用して、八月から九月にかけてカナダ

一周旅行をしてきた、かつてカナダに留学し、内野さんのカナダ理解を深めてくれたお兄さんと一緒に、バンクーバーから「赤毛のアン」のプリンス・エドワード島までカナダを横断、「楽しい思い出をいっぱい作ってきました」という。

首都オタワでは、わざわざマッギン外務大臣が会ってくれ、本を寄贈された（写真）。

内野さんと共に入賞した愛知県岡崎市連尺小学校の権田梅芳校長も六月にカナダを訪れた。連尺および前任校の同市美合小学校の子供たちが文通や作品交換などを通じて親交のあつたバンクーバーとウイニペグの小学校を中心に各地を訪問、トロントまで足をのばして帰国した。



まり、様々の生活の集中とすれば、小さな町は、ひとつのコミュニティと考えてよいような気がする。兄が以前住んでいたアムハーストバーグは、カナダ最南部にある人口六千人という小さな町なのだが、兄と街中を歩いていて驚いた。通りの向こうのアイスクリーム屋から声がかかり、スーパーマーケットでは、レジ係と兄が何ごとか話し始める。コーヒーションの戸が開いて女の子が二人飛び出して来たり、突然停車した車からは、「今晚家に来ないか」と声がかかる、といった具合に、街中が知り会いであふれている。わずか一年滞在した兄にしてこれだから、そこで生まれ、育った人々の間では、町の人全体が知り会いのようなもの、

の、と行って差しつかえないだろう。よくいわれる、個人主義という欧米人の生活に対する私たちの見方とは異なり、私はそこに大きな家族主義のような、結束した暖さを見た思いだった。

東京を見なれている私にとっては、カナダの街は総じてゆったりと、落ちついた感じが強い。そこに暮らす人々についても、そういった印象を受ける。陽気なアメリカ人とは、どこが違う。

ロブスターとブルーベリー

おいしいものに目がない私は、この面でもカナダが大好きになってしまった。

太平洋岸のスマーク・サーモンは香ばしく、食べきれないほど。柔らかくジューシーなロブスタービーフは残すのが惜しまれるほどの味だったし、プリンス・エドワード島の丸ゆでしたロブスターは毎日食べていても飽きなかった。兄の友人の女の子が作ってくれたイタリア料理も初めての味だったが、何より忘れがたいのは、よく煮こんだ野菜スープ、自家製のピクルス、ひき肉のパイや鴨のメープルシロップ煮など、兄の友人のお母さんの手によるケベックの郷土料理だった。

オタワの朝市で買ったブルーベリーは、東京では絶対味わえない新鮮さだったし、道端の農家で買ったトマトの味も忘れられない。よくカナダやアメリカには、固有のおいしい料理がなく、ハンバーガーとワラジのような固いビーフステーキだけなどと言われるが、私にはそれはとて

も信じられない。あるいは空気のせいだろうか。私には日本でよく食べる、同じ名前の店のフライドチキンでさえおいしく感じられたのだから。

未来への挑戦

夏のカナダは、すべてにおいて素晴しかった。自然を利用したアウトドア・スポーツ、過ごしやすい気候。日没は遅く、娯楽施設は快適で、誰でもがその中にすんなりとけこめる。しかし、その夏は、厳しく長い冬と引きかえなのだ、と聞かされたとき、私は大きな衝撃を感じた。

ケベックのラヴァル大学の広大なキャンパスに建ついくつものビルが、冬には、完全暖房される地下道でつながれ、プール、体育館はもとより、陸上競技場、テニスコートすら屋根の下に収納されているという素晴らしい設備に、私は、北国としてのカナダの自然とそこに住む人たちが自然と自然と調和しようとしているかを考え、感慨を新たにした。人種も、文化も、住む地域も異なる人々が、広大で美しいけれども、ひとたび冬の嵐にでもなれば容易に人の命を呑み込む、零下数十度に達する自然の中にとけ込み、そこを切り拓き、そしてその中で培われてきた歴史こそが、カナダの生活そのものではなかったか。かつてアメリカを発展させたのは、フロンティアへの夢だった。北への挑戦の夢は、そのまま未来への挑戦の夢、新しいカナダを作りあげて行く動脈につながると思う。そして、その夢



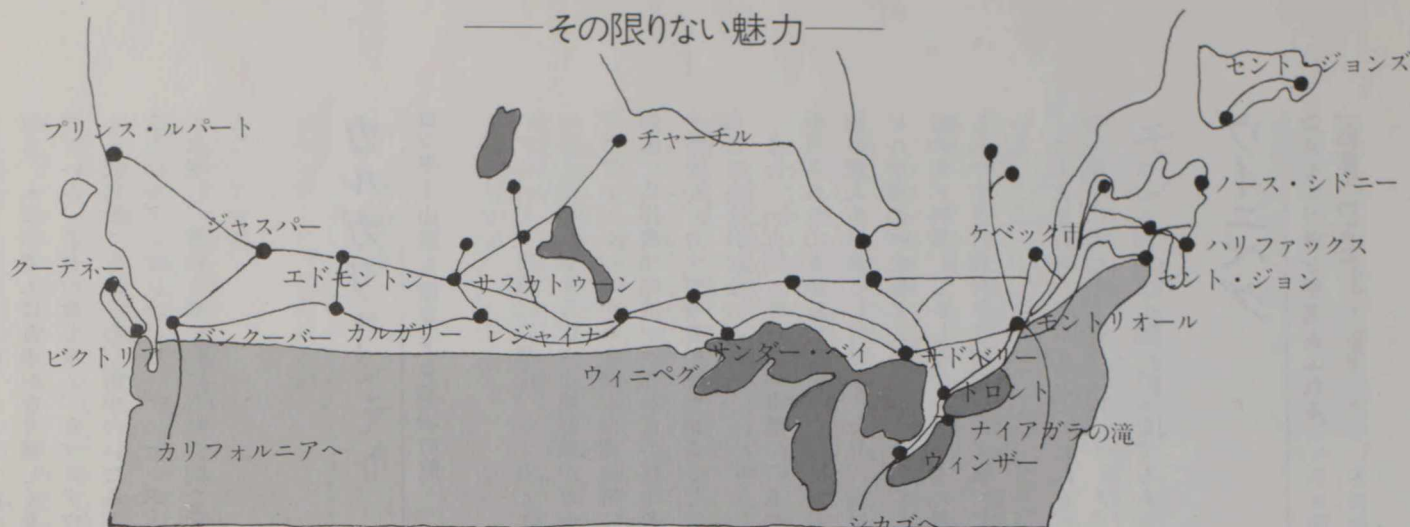
を知っている人々、何よりの財産である自然と共に歩むことを知っている人々こそが、本当の意味で、カナダ人と呼べるのではないかと私は思う。だからこそカナダの自然は、そして文化は、私たちに新鮮な奥深い感動を与えてくれるのではないだろうか。

カナダの中ではおそらく最も人工的な都市トロントで私が感じた不思議な暖みと、おそらく最古の街並みであるケベック、大西洋岸の小さな漁村と荒けずりなカルガリー、優雅なオタワの町で私の感じた何かは、成長して行くカナダの息吹きだったと私は信じた。

(聖心女子大学一年)

カナダ横断の旅

—その限りない魅力—



カナダは、アメリカとの国境から北極海まで、約一百万平方キロ、日本の二十七倍、ソ連に次いで世界第二位の広さをもつ。しかし、実態はといえば、アメリカ国境に沿った幅約三〇〇キロ、東西六〇〇キロのベルト状の地帯に、人口の九〇パーセントが住んでいるという、横に細長い国だ。細長いことで有名な南米のチリでも南北四〇〇〇キロほどだから、実質的にはカナダこそ、世界一の細長い国といえるのではないだろうか。

そんなカナダを東西に一直線に走っているのが、全長六千キロ、世界最長の大陸横断道路トランス・カナダ・ハイウェイ（カナダ横断道路）だ。

細長い国ゆえに、西と東では、自然もそこに住む人々も、社会もそれぞれ少しづつ異なっている。山岳地帯あり、大草原あり、大都会もひなびた農村もある。世界経済のあわただしい動きと共に生きている人々もあれば、いまなお辺境のフロンティアで、新しい希望の土地に夢をはせている人もいる。そんな様々のカナダの素顔を縫うように走るトランス・カナダ・ハイウェイ。このハイウェイをたどりながら、カナダを西から東に横断してみよう。

ビクトリア

英国調漂う気候温暖の島

ブリティッシュ・コロンビア州の州都ビ

クトリアは、太平洋岸最大の島であるバンクーバー島の東南端にある美しい街だ。気候は温暖で、色とりどりの花が四季を問わず咲き乱れている。退職後にのんびりとここで余生を送る人も多く、日だまりに老人の姿をみると、ビクトリアが何と幸福な土地かと思わずにはいられない。

この街のカラーは英国調だ。市街には赤い二階建てバスが走り、落ち着いた街のたたずまいは、いかにもイギリスが感じられる。それもそのはずで、ビクトリアという名前は、一八四五年にここを王領植民地と宣言したビクトリア女王にちなんでつけられたものだからだ。

バンクーバーからは、水上飛行機もあるが、普通はフェリーで行く。点在する小島を抜けて、ゆつくりと進む船にのっていると、ときおりエサをついばみに船の上に舞いおろるカモメの姿に、旅情を感じる。三時間でビクトリアに着く。

バンクーバー

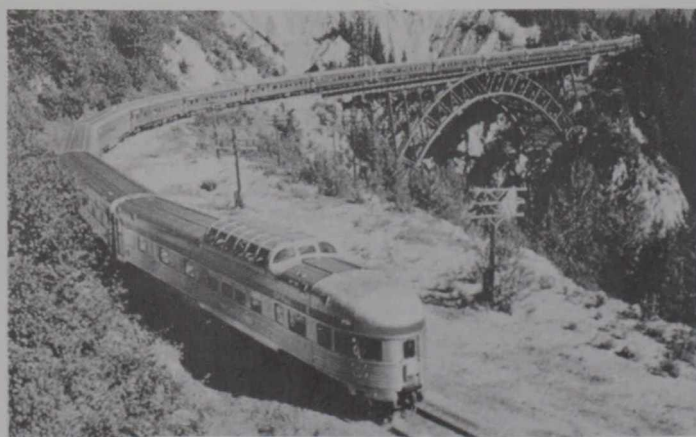
風光名媚な大貿易港

トロント、モントリオールについてカナダで第三番目に大きい都市が、西の玄関口といわれるバンクーバーだ。太平洋に面し、カナダ第一の貿易港として、商業や工業に大きな役割をはたしている。

街の名前は一九七二年英国からやってきたキャプテン・バンクーバーにちなんで付けられたもの。彼は太平洋の立派な

地図を作りあげた。その功績を記念して、この土地がバンクーバーと呼ばれるようになったという。その後、一八五〇年代のゴールド・ラッシュに東部から多くの人々に移り住み、一八八六年にカナダ太平洋鉄道が完成すると、街全体が飛躍的に発展した。

現在、市中には、他の世界の大都市と同様、高層ビルが立ち並んでいるが、それでもこの大都市は美しい海岸線を持ちつづけ、今なお風光名媚な大都会として



生きつづけている。この蔭には、美的見地から、住宅さえも隣りと同じデザインで建ててはいけなく、というほどきめ細かな政策をうちだしている市当局の努力も見逃してはならない。

バンクーバーは、カナダの中でも温暖

な気候に恵まれ、積雪量も少ないところから、人口の流入は近來かなり激しくなっている。若者の数も増え、ギヤスタウン（商店街）をはじめ、街中のいたるところにモダンなショッピング・センターが出現し、買物を楽しむにも魅力的な街となっている。

カルガリー

ロッキー山脈を望見する石油の町

アルバータ州第二の都市。ボー川とエルボー川の合流する広大な農耕地がカナディアン・ロッキーへと続く山麓地帯にある。自作農地提供が世界からの移住者をさそい、カナダ有数の酪農地帯として知られるようになった。

また、一九四一年、市の南部に石油が発見されたことから、カナダにおける石油の最大生産地として繁栄。今日、高層ビルが市のいたるところにみられるのもこの町の特徴。しかしながら、人々の親しみやすさと純朴さは相変わらず残っている。

カナダ旅行のハイライトといわれる、カナディアン・ロッキー山中、バンフ、ジャスパー両国立公園への入口でもある。

ウイニペグ

コスモポリタン気風あふれる
西部への入口

マニトバ州ウイニペグはカナダ第四の都市であり、中部カナダ最大の人口を誇る。アッシンボイン川とレッドリバーの合流地点に位置し、太平洋、大西洋からほぼ等距離にあるため、長い間「西部への入口」として知られてきた。

十九世紀中頃から商業の中心地として繁栄してきたが、現在では、世界有数の穀物市場に発展。移住による人種の混合は、同市北部の特徴である。多民族的文化をつくりあげ、すぐれたコスモポリタン気風をもたらししている。

またこの都市は、芸術活動の盛んな文化都市としても知られており、ロイヤル・ウイニペグ・バレエ団や、ウイニペグ交響楽団が年中公演している。

オタワ

新旧の調和のとれた美しい首都

オンタリオ州とケベック州の境界をな

すオタワ川の南岸に位置するカナダの首都。一八五七年、ビクトリア女王により中央政府所在地として定められて以来、カナダの政治の中心地として発展してきた。

世界でも有数の美しい首都であり、その美しさが、オタワを特徴づけている。街の中心を運河がゆるやかに流れ、通りには街路樹が緑の蔭を落とす。そして公園には花々。とくに「チューリップ・フェスティバル」が開かれる五月頃は、その美しさの絶頂だ。

また、オタワは古いものと新しいものがユニークに調和している都市でもあり、歴史的建造物と近代的高層建築、レクリエーション施設などが、見事な調和をみせている。これは連邦政府の首都公団が、他の州政府とも協力して地域開発の責任をもち、史的な建築物を保護しているためで、その努力は見事に実をむすんでいる。

カナダへの入国

カナダは査証（ビザ）なしで入国できる。ただし、旅券（パスポート）、往復の切符、カナダ滞在中の費用を用意する必要がある。また3か月以上滞在する場合は、入国管理事務所登録すること。

米国を旅行中にカナダへ観光で入国する場合、査証は必要ないが、カナダ旅行の後再び米国へ戻る場合は、事前に米国移民局で米国への再入国にどのような書類が必要か、確かめておくこと。18才未満の未成年者が成人と同行せずカナダへ入国する場合、両親もしくは保護者からの旅行許可書を必要とする。

なお、釣り道具、キャンプ用品、ゴルフ、テニスなどのスポーツ用具、ラジオ、テレビ（ポータブル）、楽器、タイプライター、カメラなど、旅行者が自分で使うスポーツ用品や趣味用品は、申告して持込むことができる。通関を容易にするために、できれば、これらの物品のリスト2通を用意している方がよい。

その他、カナダ旅行の詳細については、カナダ政府観光局（東京都港区赤坂8-5-33 山勝ビル5階 電話03-479-5851）にお問合わせ下さい。

トロント

セント・ローレンス水路が生んだ
金融・商業の中心地

オンタリオ州の州都であり、カナダ最大の人口を誇る。トロントという名はインディアン語で「集会の場所」という意味。古くからフランス人による毛皮取引によって知られ、一七九一年、当時は



アップパー・カナダと呼ばれていたオンタリオ州の初代副総督ジョン・シムコーにより開基された。

現在では、セント・ローレンス水路の重要な湖港として加速度的に発展し、それに伴う新興の高層建築が、古い街路樹の続く通りと素晴らしい対照をみせている。

カナダの金融、通商の中心。メトロ・トロントは二七〇マイル四方にわたり、

外国人居住者も多く国際色豊か。それゆえカナダの都市中、もっともアメリカ的ともいわれている。

モントリオール

国際都市「北米のパリ」

一八三三年に市制をしいて以来、国際都市として発展した。一九七六年、オリンピックが開催されたことは、まだ記憶に新しい。「北米のパリ」と呼ばれるほどフランス文化の影響が色濃く、住民の三分の二がフランス系。

一大商工業都市で、地上には周囲を圧倒する高層ビル群、地下には何マイルにもわたって地下街が広がっているが、その近代的な建物と好対照をみせる古き良き街並も残されている。また、緑も多く、総面積の一〇パーセント近くが公園で占められている。

ケベック・シテイ

ロマンチックで絵画的な町

カナダで最も古い重要な港であり、また、ケベック州において、モントリオールに次ぐ第二の産業都市でもある。

カナダにおけるフランス文化の中心地としてフランス的色彩が強く、そのせいか、十七、十八世紀のヨーロッパの都市

を思い出させる絵画的、ロマンティックな雰囲気をもつ。市民の大半が使う日常語はフランス語だが（ただし、英語も話す人が多い）それが、この町のひとつの魅力となっている。

ニューブランズウィック州

豊富な自然と由緒ある歴史

カナダのピクチャー・プロビンスと呼ばれるように、神秘的な川や光り輝く湖、そして荘大な森林など、魅力ある自然に満ちている。州都フレデリクトンは、セント・ジョン川の東に開け、昔はフレデリック・タウンと呼ばれていたように、

い歴史を持つ、ニュー・ブランズウィック大学やセント・トーマス大学がある。

三方を海に囲まれているため、変化に富んだ海岸線を持つファンディ国立公園をはじめ、海岸行楽地が多い。州都フレデリクトンには、ゴシック建築のキリスト教会大聖堂、王立騎馬警察州本部のあるジョージア朝風の建物、旧知事邸など重厚な建物が多い。

プリンス・エドワード・アイランド州

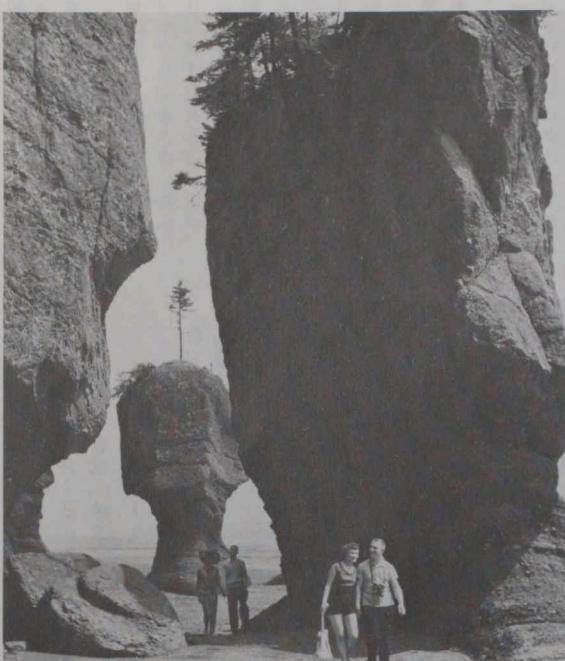
伝説と「赤毛のアン」とリゾートの島

インディアン神様グルースキャップが発見したという、

伝説の多い島。セント・ローレンス湾に浮かぶカナダで最も小さい州で、島の端から端まで車でわずか四、五時間。モンゴメリの小説「赤毛のアン」の舞台であることは有名。

一名、庭園州」ともいわれ、温暖な気候と美しい自然に恵まれたリゾート地

もあり、起伏豊かな丘、緑の牧場、白い砂浜と大西洋の青さが訪れる人の心を魅了する。



イギリス国王ジョージ三世の第二王子の名がつけられた由緒ある都市である。教育の町としても有名で、カナダ第二の古

ノバ・スコシア州

カナダのスコットランド

大部分を海に囲まれた細長いこの州はスコットランドの影響の強い州。フランス系のアカディア人が一六〇五年に開いたポートロイヤルルイ十五世が十八世紀に築いたルイスバーク・アナポリス、州都ハリファックスの星形城郭など歴史的に貴重な遺跡が多い。

州全体が大きなレジャーランドで、湖や川のほとり、海岸の広い砂浜などに数々のキャンプ場がある。特に釣りマニアにはニジマスの大物がとれ、サケの釣れる溪流は三百余を数える。また、毎年大西洋上ヤーマス沖で開催される国際マ釣り大会は世界でも有名。

ニューファンドランド州

北米最古の英国植民地

カナダで最も新しい州であり、また北米最古の英国植民地でもある。一〇〇一年にバイキングが最初の足跡をしるし、以後、ポルトガルをはじめ数多くの人種がこの地を踏んだ。

ここには世界三大漁場の一つであるグランド・バンクがあり、世界各地から漁夫がやってくる。州都セント・ジョンズは北アメリカで最も古い歴史を持つ都市であり、一四九六年にセント・ジョーンズに発見されて以来、三度の戦火にも耐え、今も天然の良港として栄えている。

カナダの主な行事

カナダの各地では、一年を通じて各種の催し物やお祭りが行なわれる。カナダの多彩な文化を背景に展開するこれらの行事は、カナダ人の気質や生活をよく表わし、それぞれに興味深い。主なものをあげてみよう。

● 2月上旬～2月中旬

ウイニペグ・カーニバル
(ブリティッシュ・コロロン
ビア州バーノン)

ケベックのウイニペグ・カーニバルに次いでカナダ第二の規模を誇り、西部では最大の冬祭り。女王の選出、氷の彫刻コンテストなど、バラエティに富む催し物。

● 2月下旬

ウイニペグ・カーニバル
(ケベック市)

一年中で最も楽しい行事で、国内外によく知られている冬の大祭典。



● 3月下旬～4月上旬

シュガリング・オフ・パーティー
(東部カナダ)

東部カナダでは、砂糖小屋でメイプル(カエデ)の木の甘い液汁を煮る白い煙が、春の訪れと雪解けを告げる。砂糖カエデの林は、でき上るメイプルシロップとあめ菓子の味見に集まる村人や観光客の砂糖パーティーでにぎわう。

● 5月中旬～5月下旬

カナディアン・チューリップ・フェスティバル(オタワ)

オタワの町のドライブアウェイに、記念碑のまわりに、公園、官公庁のビルの前庭に、全市が二百万本の色とりどりのチューリップで埋めつくされる。

● 6月中旬～8月末

クロンダイク・フェスティバル(ユーコン準州ドーン・シテイ)

船尾に水車のついた古風な汽船ケノ号のガイド付きツアー、川下りの旅、クロンダイク金鉱付近への砂金採り旅行などが期間中毎日ある。

● 6月20日～9月2日

マン・アンド・ヒズ・ワールド(モントリオール)

一九六七年の世界博覧会の跡で毎年催されている。

● 6月24日～9月3日

衛兵交替式(オタワ)

連邦議事堂の前で、毎朝行なわれる。



● 6月下旬

ミッドナイト・ゴルフ・トーナメント(北西準州イエローナイフ)

真夜中に行なわれる風変わりなゴルフの年中行事。

● 7月1日

カナダ・デー(全国各地)

カナダ建国の日を祝う祭りが各地で催される。

● 7月1日

ギヤザリング・オブ・ザ・クラウンズ(ノバ・スコシア州バグウォッシュ)

スコットランド出身者による氏族の集会、各氏族の衣裳くらべ。バグパイプの演奏とハイランドダンスの

国際的スケールの文化や歴史の展示といろいろなアトラクションからなる博覧会。各国の芸能人やレストランも参加する。

カナダの2公園が「国際文化遺跡」に

数々の恐竜の化石が発見されたことで有名なアルバータ州の「恐竜州立公園」と、バイキングが10世紀に居留地を築いたというニューファンドランド州北端の「ランス・オー・メドーズ国立歴史公園」が、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の「世界文化・自然遺産」に指定された。

「恐竜州立公園」はカルガリー市の東南およそ60キロにあり、今世紀始め以来、公園内のパッドランズ(悪地帯)と呼ばれているところから30種にのぼる恐竜の化石

が数多く発見された。これだけの規模の土地からこれだけ豊富な恐竜化石が発掘された例は、世界でもないという。

一方の「ランス・オー・メドーズ国立歴史公園」は、北欧のいわゆるバイキングが北米大陸に築いた唯一の居留地の遺跡があるところとして知られる。1961年から68



年にかけて、北欧伝説(サガ)に記録されているバイキングの居留地「ヴァインランド」を探し求めていたノルウェーのチームによって、発見・発掘された。その後も、連邦政府の公園庁が発掘を続けている。これまでに、建物跡や鉄の溶けかすなどが発見され、年代測定により西暦860-890年から1060-1070年のものと判明している。

コンテストが終日続く。

● 7月4日～13日

カルガリー・エクジビションとスタンビード(アルバータ州カルガリー)

世界一を自認するカウボーイたちが、投げなわや乗馬の技術を競い合い、ダンスに熱狂する人びとやパレードの歓声が町中にみなぎる。



● 7月12日～7月13日

ハイランド・ゲーム(ノバ・スコシア州アンティゴニッシュ)

スコットランドのハイランド地方に見られる伝統的な集い、バグパイプの演奏、ハイランドダンスの演奏、丸太投げなどスコットランド独特のゲームが見もの。

● 7月17日～7月27日

クロンダイク・デー(エドモントン)

かつての熱狂的なゴールドラッシュ時代をなつかしみ、再現するお祭り。

● 7月19日～7月27日

ロプスター・カーニバル(プリンス・エドワード島サマーサイド)

ロプスター(大エビ)の展示即売、パレード、競馬、露店市。とりたての新鮮な大エビが堪能できる。

● 7月20日～7月23日

海の祭典(バンクーバー)

水上スキー、モーターボート・レース、インディアンが戦いに使ったカヌーのレースなど、種々の水上競技のほか、海岸ではインディアンの民族ダンス、バンド演奏、野外ショー、花火大会などが催される。

● 7月21日

ナナイモ・バスタブ・レース(ブリティッシュ・コロンビア州ナナイモ)

バンクーバーまで三十マイルの荒波を、バスタブ(風呂桶)または類似のもので渡る愉快な競争。

● 7月24日～7月28日

ロイヤリスト・デー・セレブレーション(ノバ・スコシア州セント・ジョン)

米独立戦争の際、英本国に忠誠を誓ったロイヤリストたちのセント・ジョン上陸を記念する祭日。

● 8月1日～8月17日

サマー・フェスティバル(バンフ)

ロッキーマウン脈の美しいリゾートタウン、バンフで開

かれる、賑やかな夏祭り。催し物は、コンサート、リサイタル、オペラ、パレエ、演劇など。

● 8月7日

セント・ジョンズ・レガッタ(ニューファンドランド州セント・ジョンズ)

年に一度、北アメリカで催される最古のスポーツ行事。

● 8月8日～8月11日

バンフ・インディアン・デー(バンフ)

四日間わたるインディアンの宗教的なお祭り。純血を誇るインディアンの種族がおよそ千人も集まる。

● 8月9日～8月11日

アポツフォード・インターナショナル・エアショー(ブリティッシュ・コロンビア州アポツフォード)

大空に輪を描くあざやかな曲技飛行、スリル満点のスカイダイビング、いろいろな飛行機の展示、世界各国から航空界の有名人を招いての式典など。

● 8月10日～8月11日

ブリティッシュ・コロンビア・サーモン・ダービー(バンクーバー)

腕に自慢の釣りマニアが二万五千ドルの賞金目当てに、世界中から駆けつけるという鮭釣り大会。

● 8月14日～9月2日

カナディアン・ナショナル

・エクジビション(トロント)

毎年三百万もの人たちが、大規模な展示館や、一マイルの長さに及ぶ世界最大の露店市を見に集まってくる。有名な芸人たちの特別ショーも人気の的。



● 8月17日～8月19日

デイスカバリ・デー・セレブレーション(ドーソン・シティ)

ゴールドラッシュ時代への導火線となった、ユーコン準州の金の発掘を記念するお祭り。往時をそっくりそのまま再現する大がかりな催し物がハイライト。

● 8月17日～9月2日

パシフィック・ナショナル・エクジビション(バンクーバー)

各種のショーや、スポーツ行事と併行して、文化、産業の幅広い展示がある。

● 8月28日～8月29日

ダンダス耕作競走と農業祭(オンタリオ州ダンダス)

腕に自慢の農夫たちが耕作の技術を競うコンテストで、種々の農作物の品評会も催される。

● 8月29日～9月8日

エキスポ・ケベック(ケベック市)

農産物、工業製品などを広範囲に展示するケベック州の博覧会。

● 9月上旬

トーテムポール・ゴルフ・トーナメント(ジャスパー)

アマチュア・ゴルフアールのトーナメント。かつて、ピング・クロスビーも参加して優勝したことがある。

● 10月中旬

オクトーバーフェスト(オンタリオ州キッチナー/ウオータールー)

ドイツはババリア地方の名物であるどんちゃん騒ぎのお祭りをくりひろげる。

● 11月上旬

アトランティック・ウインター・フェア(ハリファックス)

家畜品評会、農芸品展示会、ホームクラフトの品評会などが盛大に開かれる。

カナダ人の生活にとけ込む

レジャー

橋田忠明

こんな話がある。欧州人に「レジャーとは何か」と聞くと、「それはレクリエーションだ」と答えるが、日本人にはすぐレジャー産業と費用の消費が思い浮かぶ。米国人はその中間。そしてカナダ人にこの質問を投げると、「人生のすべて」とか「文化の創造」といった答えがはね返ってくる。

毎年夏になると、バンクーバー、バンフには日本人観光客が文字通り大波のように押し寄せる。最近ではカナダ西部だけではなく、東のトロント、モントリオールに足を伸ばす人たちがふえた。そうした日本人観光客の目に、家族連れで公園でピクニックをしたり、湖上でヨットを楽しむ姿が映る。

「見ていると何の悩みもなく、童心そのまま遊びまくっている感じがすね」とは、ほとんどの観光客がつぶやく感想だ。大自然と澄んだ空気、鮮やかな緑——。カナダに憧れて訪れた日本人たちは、あまただしくカナダを旅し、ひと夏のレジャーを最大限に過ごそうとする。そこには、レジャーまでも、「猛烈魂」で裏打ちされている印象すら受けかねない。

「こんな美しい自然のもので、夏はヨットやフィッシング、冬はスキー、スケートとダイナミックなレジャーを満喫できるのだから、カナダ人は幸せですよ」と誰もが言う。ただひとこと、「羨ましい」と述懐する若者も多い。

確かに、中間所得層ともなると、ヨットやロッジを持つてあり、週末になると家族や親類が集まってレジャーを楽しむ。カナダは十月末ともなると冬仕度にはいり、雪ごもりの生活が半年余り続く。クリスマス休暇には米国のフロリダや中南米に逃避する人も多い。

「ビジネスでも、レジャーでも、本当にエンジョイできるのは一年のうちにか月ぐらいいかない」とカナダの人たちはボヤク。雪がとけると、待ちかねたようにに彼らはレジャー計画に奔走する。職場でも家庭でも気分的にパツと華やぐのがはつきり分る。シーズン中の皆の挨拶、「エンジョイ・ユア・ウィークエンド！」は心からお互いにかけて合うレジャーの合言葉と言える。

だが、実際にカナダ人の余暇の過ごし方を見ていると、日本とは発想が異なる。

意外に合理的だし、健全である。

ある平均的なA氏の家族（トロント在住）の場合、A氏が毎日職場から帰るのは夕方五時頃。夏は十時近くまで明かるいので、芝生を刈ったり、庭の手入れ、週末用にボートを修理したり。奥さんの家事を手伝うことも多く、近くの公園で子供たちとボール投げをしたりして遊ぶ。平日でも、思いたてば、車にバーベキュー道具を積み込んで湖畔に出かける。公園では親しい近所同士の家族がバーベキューに舌鼓みを打ちながら、会話を楽しむ光景をよく見る。ゴルフも近くのゴルフ場で帰宅してから低料金で十分楽しめる。

夜ともなると、テレビの前で夫婦の語らいである。あるいは、家の内装替えと趣味で少しずつ楽しみながらやる。子供たちをベビシッターに頼んで、夫婦でパーティーや観劇に出かけることもしばしば。そして、土、日の週末は近くのロッジや湖畔に泊りがけで出かけ、夏の陽光を一身に浴びながら遊ぶ。日光浴をしなが、小説に読みふける人も多い。

子供たちの夏休みは三か月。前半はキャンプにやり、後半に家族連れで旅行に出る。カナダでは経営者ですら夏休みは一月ガツチリ



とり、休みをとらないと家族から文句が出て、家族会議にもなりかねない。その旅行も、「故郷」の欧州各国に帰省したり、リゾート地域で長期間滞在して過ごす。費用は千ないし二千カナドル程度。レジャーに金の糸目をつけない日本人から見ると、いかにもつましい。親や親類と集まって、普段は忙しくて交流できない埋め合わせをする。戦後日本人が忘れがちな精神的なレジャーが、カナダでは意識されずに生きている。

カナダ観光省のマーサー・マーケティング局長によると、「カナダのレジャー



は内的、つまり精神的、知的な方向に進んでいる」と

いう。ゆりかごから墓場まで、人が心の中に豊かな気持を持って、

楽しく送る――それがレジャーだという。

だから、職場で働いていても機智に富んだ会話を楽しみ、レジャー化する。不幸

や困難すらも、それを乗りこえたとレジャーになるという。国や州の政策にもそれが表われ、レジャー政策はスポーツ・文化省が担当している。

そうしたカナダ人のレジャー意識を満足させるために、レジャー産業が成り立つ。たとえば、カナダの観光消費は昨年

は百一億ドルと前年より一三・三%の伸びを示している。海外での観光赤字が財政の足を引っばっているが、「レジャー

用に消費する食物や機械類を広く加えると、レジャー全体では必ずしも赤字ではない。従来の分類を改める必要があり、議論を変える必要がある」（マーサー局長）ということになる。

カナダのレジャーは最近、五つの大きな変化が出ているという。

第一は旅行でも一定の個所に長く滞在する傾向が一段と盛んになってきていることである。そのため、カナダ国内のリゾート地域の見直しが始まっており、公園やスケート・リンク、プールなどのコミュニティ施設がいつそう拡充されようとしている。

第二は、女性が職場に進出し出して、レジャーの決定権が主婦に移りつつある点だ。十年ぐらい前まではほとんど男性が主導権を握っていたという。それが女性に移り出して、様々な変化が生じ始めているといわれる。

第三はレジャー時間とレジャー費用が増加したこと。休暇は一、二か月が普通になり、世代的にも子供は大学を卒業するとすぐにレジャー消費にかなりの金を向ける余裕が出ている。この傾向はますます増大するとみられている。

第四は、コンピュータの普及や輸送など各種の施設で技術革新が急速に進んでいる点である。レジャーがきわめて合理化され、便利さを増している。

第五は、レジャーの社会システムが発達してきた点だ。教育が高度化し、周囲にはテレビ、新聞、書籍類など教養、知識を満たすものが豊富になっている。レジャー情報が完備され、レジャーの選択や過ごし方が賢明になってきた。この最後の変化が最も影響力を持ち、社会全体に「レジャー革命」を起こしていくものとみられている。

日本と比較して、このようにカナダの人たちが非常に割安で、レジャー生活を楽しめる点特徴としてあげられる。一流のオペラでも、コンサートでも、お芝居でも安い。十ドルも出せば、絶好の場所から見られる。ゴルフは一ラウンド五ドル以下だし、スキーもスケートも料金は安い。これは国や州がこうした文化面に財政補助をしていることもあるが、妥当な料金でないと繁盛しないように、カナダの大衆の方が賢く需要を作っている背景が響いているように。

こうした「知恵」は、コミュニティに根づいている多様なクラブ組織でも分る。多くは家庭の主婦が幹事になって、体育クラブから各種レジャー、はては日本のお茶や生花のクラブすら作られている。特に、冬が近づくと、こうしたクラブの勧誘がふえ、幹事から家庭に入会の誘いの電話がかかる。一週間に一、二回、この種のクラブに参加して、同好の仲間たちと親しくつき合う。それはまた家庭交流にもつながっていく。コミュニティのつき合いが深まっていくのだ。その運営は多くは主婦たちのボランティア活動である。「家庭にとじ込もっていないで、



無償だけれど社会奉仕することは、それなりに有意義だ」と、ある主婦はいう。こうしたクラブは主婦の社会活動、冬の雪ごもりが半年以上も続くこと、またカナダ国民が異民族から成っているため、お互いにクラブを通じて交流を深めるネライで普及したのだろう。

カナダのレジャーを現実にカナダに暮しながら観察すると、至る所に合理的で最大の成果をあげようとするカナダ人の知恵と工夫を発見する。そして、戦後の日本人が経済の高度成長の過程でいつの間にか見失った色々な断面を見つけているのだ。

たとえば、近所の人たちとコミュニティで親しくつき合い、親から孫まで三世代が一所に集い、昔からのいい面を語りついでいく――などは、昭和の前半まで日本に残っていた風習であった。

カナダで急増する日本人観光客を見ながら、はたして忙し気に旅行していく人たちがカナダ人のこうしたレジャー面を見つめていくだろうか、と疑問に思うことがある。日本でも最近では経済だけでなく、歴史、文化を見直そうとの風潮が芽生えている。

ひと頃のレジャー・ブームは、日本では欧米からのレジャー産業の導入に走り過ぎた嫌いがあった。これからはカナダや、米国、欧州の、こうしたそれぞれの国民が作り上げたソフトウェアに関心の目を向けることが重要になろう。

（日本経済新聞トロント特派員）

観光カナダと文学カナダ

平野敬一

現代カナダの代表的詩人のひとりアー
ル・バーニーに、「カナダ・病歴」とい
う有名な短詩がある。カナダという国を
高校生にたとえ、その病歴を語る趣向に
なっているが、僅か十行余りで若い国カ
ナダがもつさまじまの欠陥や未熟さをみ
ことにとらえている。最終行で、カナダは
「いつになったら大人になるのだろうか」
とバーニーは冷たく突き放している。

こういう病気のイメージは、バーニー
の好むところらしく、やはり同じころと
いうのは戦後間もなくの作品「大陸横
断」で、カナダを病魔に犯された婦人に
たとえているのがある。

「……病気で死にやしないだろうか
この婦人は、すぐ老けてしまえばいい
うだ

わたしたちと共に。

その病気に効く抗生剤を

外部に求めるわけにいかない」

と詩人はうたい、自分で病気をなおす

しかないと訴えているのだが、どうもこ

のカナダのイメージは、あまりさわやか

でない。

バーニーという詩人だけがカナダにつ

いて病的なイメージをもっているわけで

はない。カナダについての病的な、否定的

なイメージは、カナダ詩の発生と同じは

ど古い。たとえばカナダの自然がもつて

いる残酷さや非情さをうたった作品とな
ると、もう枚挙にいとまがないほど多い。
散文の作品にも、もちろん、こういう否
定的イメージは、ふんだんにある。

カナダ文学に現われるカナダのイメー

ジを詳述するのが、本稿の目的ではない。
私がいいたいののは、アール・バーニーに
限らず、カナダの詩人や作家がとらえる、
こういう否定的なカナダのイメージは、

観光案内的なカナダの紹介記事には、絶
対といっていいほど登場しないというこ
とである。つまり、文学のカナダと観光
のカナダとの間には、大きなずれがある。

どうかせめて、両者まったく相重ならない
ほどかけ離れているのである。いったい、
どちらがほんとうのカナダなのだろうか。

私は飛ぶよつだが、私は大学で担当し
ているカナダ文学のクラスで、学年始め
に受講生に、カナダについて各自がいた

っているイメージを書かせることがよく
ある。大学生といつても、あまりカナダ
について予備知識をもっていない場合が

多いので、私の方もあまり期待はしない
ことにしているが、それでも学生たちが、
ほとんど例外なく、観光カナダのイメー

ジしかもつていないことに、がっかりさ
せられることが常である。

いわく「森と湖の国」、いわく「雄大

な大自然」、いわく……、と旅行会社の
案内パンフレットのキャッチ・フレーズ
を羅列するのが大部分である。カナダ文

学の勉強は、したがって、そういう観光
案内的な虚像にまでわされないで、カナ
ダの実像をさぐることなのだ、と私はい

いきかせざるをえなくなるのである。
観光のカナダが虚像で、文学のカナダ
が実像であると言いきると、異論が出る

かもしれない。しかし、こういう観光対
比は、虚像対実像の対比は、おそらくカ
ナダに限られたことではあるまい。

日本でいえば、たとえば長野県の観光



地を、次々と観光バスに乗って、あるい
はマイ・カーを駆って回ってみても、目
に入るのは観光客向けのつくり顔だけで
ある。それは表向きの顔であつて、素
顔とは違うのである。土地の素顔を知ろ
うとすれば、観光という姿勢から脱却し
なければならぬ。観光をするより、た
とえば古いところで馬崎藤村の作品と

ものである。
息づかいが、はるかによく伝わってくる

文学作品中に歪みがないとは、もちろん
いえない。所詮、作者の眼鏡を通した像
だから、そこにある種の色合いがくの

は、やむをえない。しかし、真実を伝え
たいという気持は、文学者の方が、観光
案内業者より、はるかに強いことは、論

をまたない。
観光事業は、本質的に客寄せである以

上、真実というものが入り込む余地はあ
まりない。観光客は、自分の目でみた現
地が絵葉書あるいは観光パンフレット通

りであれば満足するのだから、受入れ側
が、その期待に添うようにつとめるのは、
当然であろう。すべての人が真実や美像

を求めているわけではないのだから。こ
ほど違わないであろう。
しかし、ほんとうにカナダのことを知

りたいという人は、観光カナダに満足せ
ずに、文学カナダ（熟さない言い方だが）
に、その目を向けなければならぬまい。

始めにアール・バーニーの詩を引き合
いに出したが、すぐれた作家になれはな
るほど、自国の自然や人間に向ける目は、

厳しさを増すように思われる。深い愛情
に裏打ちされているのに、というより裏
打ちされているからこそ、そのまなざし

は厳しい。語り口もけつして甘くない
（この点、二流以下の詩人になると、平

カナダ人の

発明発見 (VII)

●超大型映写機

たてが六階建てのビルと同じ高さ、横がおよそ二十五メートルという超ワイド・スクリーン。八十八個のスピーカーから六トラック・ステレオでひびきわたる音響……。

世界で技術的に最も進んだ映写機といわれるアイマックス (IMAX)。I は目、MAX は最大という意味) で映写すると、観客は文字通り画面に吸い込まれた気分になり、全く新しい映像と音の世界を楽しむことができる。

アイマックスを開発したのはオンタリオ州ストリートビルに住むウィリアム・チェスター・ショー。一九六〇年代のことである。大阪万博や東京晴海の宇宙博でアイマックスによる映画を見た人もいるはずである。

●コンピュータ点字

一九六六年、ケベック州ハルのロラン・ギャラルノーさんは、コンピュータを使って印刷された文字を点字に変える方法の研究に取り組んだ。

捨てられた材料、古い電線などを利用して、自宅地下の作業室でコンピュータ

を組み立て、六年かけてシステムを作り上げた。その方法は、まず普通の文章をテレタイプに打ち、パンチ(せん孔)されたテープをコンピュータにかける。コンピュータはそれを翻訳し、省略した点字に直す。

ギャラルノーさん自身もほとんど目が見えない。

●陸上を走るヨット

ヨット、といえば海にきまっているが、写真の帆船(?) は陸上用。

オンタリオ州の帆走コーチが、まだ水上へ乗り出せないヨット乗りの練習用に作ったもので、三個の車輪がついていて、ヨットのように帆をあやつりながら走らせる。駐車場やテニス・コートなどの広場、氷の上など、平らなところだとどこでも大丈夫。わずかの風があれば走るが、駐車場で時速三〇キロ、氷上で五〇キロの記録がでている。自転車より安全だとのことで、誰にでも乗れそう。

操作はヨットと同じで、車輪のかわりにフロートをつければ水上で走らせることもできるという。



●標準時

かつて、時間は村や町によって異なっていた。太陽が頭の真上になると正午というわけで、その土地の経度によって時間が少しづつずれていたのである。したがって、汽車などで東西に旅をしようと、駅ごとに時計の針を動かさなければならなかった。

こうした不便を解決したのが、スコットランド生まれで、のちカナダに移住したサンフォード・フレミングである。

フレミング(一八二七—一九一五)は、一八七八年、カナダ科学知識振興協会から一連の論文を発表し、中心となる子午線を設定して、世界を二十四の時間帯に分け、それぞれの時間帯における時間を統一するよう提案した。フレミングはこの提案の採用を強く訴え、その結果、北米のすべての鉄道会社がこれを使うことになった。

そして一八八四年、ワシントンD.Cで開かれた国際本初子午線会議において、フレミングの案は正式に採用され、十九世紀末までに、ほとんどすべての国がこれを取り入れた。これが今日の標準時である。

フレミングは、ほかに、カナダ最初の郵便切手の図案を描き、バンクーバーからオーストラリア間の海底ケーブル敷設の図面を作り、カナダ最初の正確な大型測量地図を石版刷りにしたことでも知られる。

編集後記

○いやはや、全くうっかりしてしまいました。本紙三月号でケベック州の州民投票について予告しておきながら、その結果をお知らせするのを忘れていました。七月号で扱う予定だったので、同号が中止になったため、すでに掲載したものと何となく錯覚していたのです。新聞ですらにご承知だとは思いますが、念のため遅ればせながら、簡単に報告させていただきます。

○州民投票が実施されたのは五月二十日。質問の内容は、ケベック州が他のカナダと経済的連合を維持しつつ独立することについて、その交渉を州政府に委任するかどうか、ということでした。これに対し、賛成五九・五%、反対四〇・五%と、賛成派が圧倒的な過半数を占めました。レベック州首相は敗北を認め、トルドー首相にケベックの現状を改めるべく憲法を改正するよう要請しました。

○これでカナダ分割の危機は一応回避されたわけですが、連邦政府とケベック州以外の各州は現状変更に対するケベック州民の希望に理解を表明していませんが、一夜で解決がつく問題でないのも事実です。憲法問題と深くかかわっており、今後はケベック州内の動き、連邦政府の対応、各州の態度が注目されます。

○さて今号は観光特集。普通の観光案内では味わえないカナダの旅をご紹介します。たいと考えていますが、ご満足いただけましたかどうか。(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100東京都港区赤坂七丁目三十三八

カナダ大使館広報部